

考え



読む毒、  
読んどく？

弦楽器イルカ  + 友人

## 予告編：第八回『想像ラジオ』と斬新な王道

---

恒例になった途端に早速行き詰ってる今回の予告編。革新的な核心を全く確信できないとか、つまらないダジャレにこれ以上逃げてる場合じゃない。

さて芸能から政治まで、罵詈雑言の電波がずっと前から頭上を飛び交い続けてる気がする。その一方、想像力で夢を現実にする人々もいる。想像力にも正か負かの方向性があるって、でも、他人を呪う負の想像力で俺が救われたことはなかった。今まで自分がより生きやすくなることでしか幸福を得てこなかった。だから今回はたとえば、ある民族を皆殺しにする想像力と、みんな仲良く平和に暮らす想像力の間、橋を架けてみたいと思う。

眼前の風景をスルーせず、かといってバッシングもしない。ただ全部飛び越えてここにとどまるという、斬新な王道を目指す。俺が書く意味を考えたら、そういう妄想を駆使する以外にないだろうな、と。

というわけで、日々浮かんでは消える雑感を咀嚼して、書くに値する妄想の風船ガムを膨らませるのにだいぶ時間がかかってます。友人にはたぶん、海外から見たこの国の話を考えてもらおうかな、と思ってますが、どうなりますことやら。

考えるウマシカたちが、群れを成して平原に還る光景をぼちぼち妄想しつつ。

「お金と感情と公平さは等価に」がモットー

ウマシカ制作委員会

前は俺なりに納得できる石が置けたんだけど、今回、更に上いく石を探すのにだいぶ時間がかかった。とはいえネットの文章なんて、川原で売ってる石と一緒にそこらへんにゴロゴロ無価値に転がってる。それをわざわざトンがらせたり捻じ曲げたり珍妙なレイアウトして、無駄に業を磨いてる感じがする。まあいいや。業全開でGOだ。

前回のUの感想、面白かった。小説を絵に例える着想が俺にはなかった。そして世間が『色彩を～』を忘れ去る早さもすごいと思う。巷はいまや流行の朝ドラ一色って感じ。サイクルが早い気もするけど、人間を記号化した『色彩を～』にはない人間臭さの魅力が、例の朝ドラにあるからかなって思う。あと小説には不可能な、耳で聴く音の面白さね。方言と、歌と、音楽。部屋と、Yシャツと、業。

さて今回はまず、終わった選挙の投票率向上啓発コピーから始めたい。

◆2013年度夏・選挙啓発コピー

『仕方ない。投票行くか』

終わったドラクエのレベル上げと同程度に無駄な一石を投じたところで、次は全く違う話をしたい。今回は点々と置いた言葉をうねりながら回収するグルーブ感重視なので、振り落とされないうように覚悟してください。

俺の記憶では10年以上前、ある文芸誌で「なぜ人を殺してはいけないか？」という問いに文化人が回答する特集があった。若者でもわかるように答える、といった趣旨だったと思う。

それ読んで、俺はピンとこなかった。違ುದる文化人、この程度か、ってがっかりした。そのとき俺が考えた答えはだいたいこんな感じだった。

「いや、全然いけなくはないよ。生物ってもともと弱肉強食だし。どんな行為もしてはいけないなんて制約はない。その証拠に、戦争とか正当防衛とか、人を殺すことが法的にも倫理的にも許容される場面はある。殺しても、仕方ない。

ただ大抵の場合、殺人罪を犯したらあなたは辛い思いをする。法的な罰という苦痛や、己の罪悪感に苛まれるだけじゃない。最も重要なのは、被害者を慕っていた人々から恨まれる辛さだ。親、子ども、兄弟、親戚、友人など、被害者の関係者が多ければ多いほど、行き場のない悲しみがあなたにぶつけられるだろう。彼らが被害者と歩むはずの未来まで、あなたは殺してしまったから。つまり殺人とは、関係者の将来も殺すことだ。更に言えば、あなたを慕う人々をも悲しませ、将来を奪うことになる。（これは自分を殺す自殺も同じだ）

戦争や正当防衛という非日常であれば、こちら側の自分たちを守るために戦った結果だと自己正当化して、被害者や関係者を心理的に無視できるかもしれない。しかし日常内の殺人では、法的な責任だけじゃなく、たくさんの他人の将来を奪った責任を背負いきれず、あのとき殺すべ

きじゃなかったと、いずれあなたは後悔することになる。

だから、人を殺してはいけない。必ず後悔するから」

さて、こんな賞味期限切れの文章書いたのは今回考えた物語に関係があるからなんだけど、いちいち説明なしで以下にあらすじを掲載します。

竜暦2013年。そこは、竜の使い手たちが政治を司る世界。

先の大戦で小島国は、大国の竜の炎で焼き尽くされ、たくさんの死者を出し敗戦国となった。

その後、小島国は侵略者のレッテルを貼られると共に、竜の使用を禁じられ、大国が持つ竜の傘で防衛される見返りとして、大金を徴収され続ける。更に半島国が捏造した歴史を学び、半永久的な謝罪と賠償を要求される現状に、青年は憤慨する。

「半島国の盗人どもめ。小島国から出て行かないなら皆殺しにしてやる！」

ある日、青年は同い年くらいの女性が悪漢に絡まれている場面に出くわし、得意の小島国拳法で悪漢を追い払う。

恐怖でしゃがみ込む女性を置いて、名前も告げず立ち去ろうとする青年。

「待って！」腕をつかまれ振り向くと、女性の潤んだ瞳とその可愛らしさに目を奪われる。御礼にと、強く請われるがままに携帯番号を交換するがその後、連れて行かれた半島国料理店に、青年は戸惑う。

「気に入らなかった？」

「すまないけど、半島国料理は苦手だ」

「そうなんだ、残念。ここね、あたしの親戚がやってるお店なの」

「...ってことは、君は半島国人か？」

「半分ね。ハーフなの。お母さんは日本人。おじいちゃんが20歳のときに小島国に移住したから、あたしで3世代目。みんなもう小島国で暮らしやすいように帰化しちゃったけど、あたしも20歳になって改めて、半島国のルーツも大事にしたいなって思うようになったの」

「...俺は、半島国人は嫌いだ」

「え？」

彼女の瞳に真正面から見据えられ思わず、傷つけぬよう言葉選びにあたふたする青年。

「いや、君は、ハーフだし、帰化してるし、それは、いいと思う。でも、小島国で生まれた誇りを持ってほしいっていうか、もう半島国なんか忘れて、小島国人として国益を優先するって言うか.....」

「あたしは小島国の誇りも、半島国の誇りも、どっちも持ってるつもりよ。素直に、二つの国が仲良くなるために協力したいって思う。双方にとって一番の国益ってそうじゃないかしら」

初対面でもある彼女に、反論すべきか迷う青年。

「俺は、両国の国益が一致することはないと思う」

「どういうこと？」

「あいつらは小島国にたかるハエだ。帰化しないで特権を得てるハエは半島国に送り還したほう

がいい」

怒り出すかと思ったが、彼女は少し考えたような顔で青年の顔を見つめている。

「...特権？」

「ああ。税金とか、生活保護とか」

「あたしには、帰化してない友人も、半島国からの留学生も、もちろん小島国人もいろんな知り合いがいるから、みんなが仲良くなってくれば、あたしも一番生きやすいつて思う。それに少なくともそんな特権得てる友達はいないと思うし、なにより帰化しないのは、ちゃんと知ってほしいからよ」

「何を？」

「あたしたちがここにいるってこと。既に小島国人の100人中2~3人は、戦後に住み着いた半島国人か帰化人がルーツなの。でもたとえば、小島国人を47都道府県に分けて特色や方言を誇るバラエティ番組は当然のようにあっても、50人に1人以上いる半島国にルーツを持つ人々の現状を、真正面からとらえる教育をこの国はしてこなかった。ここで帰化しちゃったら、最初からいなかったことにされちゃう気がする」

「...でも君は、帰化したんだろう？」

「だから逆に、半島国のルーツも大切にしたいって思ってるのよ。それにね.....」

そこで彼女はなぜか、可笑しそうに笑い出した。

「どうした？」

「あなたさっきあたしを助けてくれたでしょ？ あたし、大学サークルで国際交流の活動してるんだけど、あの人に半島国に帰れって言われたから、この国に住むのにあなたの許可はいらないって言い返したの。そしたらあんな感じになっちゃって」

イタズラっぽく笑う彼女に、言葉をなくす青年。

「あなたが言うように、もし不公平な特権があるなら、それは制度の問題でもある。だったらオープンに話し合っ解決すべきじゃないかしら。憎むことで制度が変わるワケじゃないから」

「でも歴史を捏造し、反小島国教育してるのは半島国だ。俺は小島国民として半島国を許すことはできない」

「...ねえあなたって過去に、半島国人に何かされたの？」

「いや。ただ、社会悪が許せないだけだ」

「ん〜」

彼女は首をかしげながら、何かを考えている。そして真剣な眼差しで、青年に語りかける。

「そうかしら。あなたはたぶん、知ってほしいのよ。」

この国に限らず、全ての平和は多かれ少なかれ無知に支えられていると私は思ってる。どんな問題も、知らなければ起こっていないことになるから。逆に問題を知ってしまえば、平和は崩れてしまうかもしれない。そこに怒りや憎しみが生まれるかもしれない。

でもこの国の無知なる平和に対して、足元にある隠された問題をあなたは訴えたいんじゃないかしら。

だってあたしもそう思うもの。本当に起こっていることが何なのか広く追求してほしいし、一

人でも多くの人に知ってほしい。でもあなたから見える問題と、私から見える問題は、大げさに言えば海を挟んで反転しているのかもしれない。それは今まで誰も本当を明らかにしてこなかったから、本当がいくつもあることになってるからだって思うの」

彼女が青年に向けた真っ直ぐな意見に対して、青年も真剣に答える。

「いや、本当は俺が知ってるひとつしかない。半島国に騙されてるだけだ」

「騙されてるとしたらまず、どれが騙しでどれが本当か、そこから話を始めたらどうかしら」

「話し合う必要なんてない。半島国人は追い出すか、皆殺しにすればいい」

「本気で言ってるの？」

「...だとしたら、なんだ？」

「もし本気なら、まずはあたしを殺しに来て。じゃ、来週また会いましょ。ここで」

「え？」

「あたしは殺される側の味方をしたいの。来週あたしをまだ殺す気がなかったら、代わりに一品だけこの料理を食べてね。そうやってあたしを殺さずに毎週会い続ければ、あなたはどんどん半島国料理を好きになるってワケ」

呆れて青年は二の句が告げない。

「バカじゃないのか？俺が毎週こんな店に来るはずない」

「この料理は最高なの。一度食べて嫌いになるワケがないわ。ねえ、あなたがあたしを殺すのが先か、あなたが半島国料理を好きになるのが先か、勝負しない？」

翌週、青年は半島国料理店には出向かない。ただ、半島国にルーツを持つ彼女と直接の交流を持ってしまったことで、青年の中に葛藤が生じる。

あの料理店で自分を待っている彼女の姿を考える。彼女の真っ直ぐな視線が自分に向けられていたことを思う。彼女は俺に何を知らせたいのだろう。そして俺は彼女に何を知ってほしいのだろう。そこまで考えてとっさに打ち消す。

くだらない。これ以上知るべき事柄などない。この際本気で、彼女を殺すべきなのかもしれない。でなければいっそ、簡単に迷う自分自身を殺してしまおうか。

そのとき、とてつもなく大きな横揺れが起こる。地震直前の低い轟音に似た、大気を震わす竜の咆哮が響き渡る。

TVをつけると、国籍不明の竜の一群が小島国に攻め入ってくる映像が映し出される。竜の羽ばたきが巨大津波を起こし、街が海に飲み込まれていく。竜の口から吐き出された炎が街を焼いていく。

そのとき、着信音、見るとディスプレイに彼女の文字が。出ると、「助けて」という叫びで電話が断ち切られる。

青年は思わず立ち上がり、迷う余地なく外へ飛び出して行く。

ここまで書ければ終わり。

謎の竜の正体とか襲う理由は、特にあってもなくてもいいと思う。青年や女性が抱える背景や悩みも詳しくは書かない。話を狭く限定したくないから。

ちなみにこの企画の最大の目玉は、全部の設定を反転させた韓国語版を同時発表すること。つまり韓国語版の舞台は半島国で、青年は半島国出身、反小島国運動をしている。女性はハーフで、両国の友好に貢献したいと思っている。他の細かい設定も必要な部分は直す。

こういう類の企画があったら、結構面白いんじゃないかと考えた。

人生は暇つぶしで、巨万の富を得ようが、貧乏暮らしをしようが、一度に感じられる幸福感には上限も時間制限もある。快感だって過ぎれば苦痛になる。快感や幸福感だけを延々と感じ続けながら生きる人間はいない。

それならば与えられた人生の枠の中で、できるだけ幸福に文化的に暇をつぶしたいと俺は思っている。そこで文化に対する俺なりの答えとして、バッシングに与しない物語で暇をつぶそうと考えた。あとはじめに業業言ったのは『GO』に似ちゃったからなんだけど、『凶気の桜』っぽくもあるから窪塚恐るべしって思う。

あと朝ドラ観て思ったんだけど、「グレル」「不良」って昔はツッパリが暴力ふるったり、裏社会の構成員になったりするイメージだけど、それは体育会系のグレで、今は文化系のグレもあって、それが引きこもりなんだと思う。暴走や暴力の代わりにネット上の荒らしやハッキングがあって、その能力を買われ裏社会に取り込まれたりもする。

更に、「斬新な王道」ってタイトルも朝ドラに関連してる。

物語の軸は王道、つまり家族、恋愛、友情、夢とかありきたりのテーマでも、味付けに使われる小道具や会話が斬新で魅力的なら、それだけで人は面白がってくれる。

っていうか、人間ってそもそも昔から大して変わってなくて、古典や源氏物語がいまだに現代語訳されて魅力的だったり、それこそサル山の猿社会と人間社会だってあんま大差ない。所詮どこまで行っても人間なんてその程度だ。ちなみに前回話題にした『一卵性恋人』も改めて聴き直してみたけど、やっぱりまだに極北の音楽だと再認識した。我々人類は『一卵性恋人』以上でも以下でもないんだ。いや、これは完全に言い過ぎた。

ちなみに『想像ラジオ』は芥川賞逃したけど、今更いとうせいこうを新人賞にノミネートすること自体ちょっとどうだろう。表現としては面白いと感じたので興味があればご一読を。内容はあえて詳しく触れませんが、想像してください。

さて、それでは次回なんだけど、まず原発作業員基金を設立するという提案について考えたい。俺が勝手に考えたんだけど。原発事故の復旧作業してる人に、一日一万円を支給する基金を作ったらいいなと。復興のためのお金が有効活用されてない中で、お金の使い道としてかなり真っ当なんじゃないかと思うんだよね。んで、お金を渡すときにきちんと身分証明をして、誰がどこでどれだけ働いたか、第三者機関がきちり管理するシステムとして機能させればいい。あとついでに多数の作業員に聞き取りして、彼らの真の姿をまとめて本にするとこまでいければベストかな。

あと、福島原発で亡くなった人リストに所長を追加したり、「誰も死んでないから、原発を再稼働する」って話とDVとの関連を書きたい。

そもそも事前に「一人死んだら再稼働やめる」とか全く約束をしてないから、後出しで何でも言えるんだよね。「日本の人口で見たら多少死んでも影響ないから再稼働する」とか、「12人の小児甲状腺ガン手術くらいなら、因果関係は不明だし再稼働する」とかね。何人避難したらとか、何人病気になったらって事前に決めないと何も言ったことにならない。これは国語の問題だと思うんだよ。

今回はこんな感じ。

どうかな？



